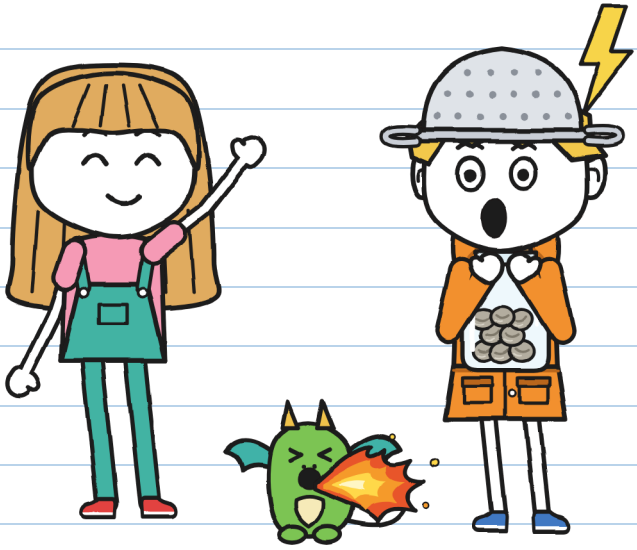
ありえない はいたつ・2

かみなり まえに あけるな

Lui Eriksson



（グニの ノート）

サイズ L
上級・11+

ありえない はいたつ・2
かみなり まえに あけるな

文と絵：**Lui Eriksson**

サイズ **L**・上級・11+

日本語版：**LinguAula**

初版：2026

© 2026 **Lui Eriksson** · **info@linguaula.com**

自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

シリーズの 2さつめ。1さつめは「このにもつは かみつく」。

LinguAula

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

この本を書いているあいだに、けがをしたかみなりは一つもいない。 —J.



そして、ほかのだれのものでもない。 ―J

見つけても、かみなり前に開けちゃだめだよ。

おはなしのなかだけ

このはんこは、お話の中だけのことをしめす：きみはやらないで。何ページもつづくときは、「ここから」と「ここまで」が書いてある。本当のあらしのときは、76ページを見て。 ―J.

だれが だれ？



グニ。どようびの はいたつやさん。あらしの ハンター（まあ、だいたい）。この ノートは グニの。



フリータ。いなびかりから かみなりまでの びょうすうを かぞえる。みどりで かいて、「J.」と サインする。



パンくず。ドラゴンの こ。グニの まねを なんでも する。ほんとうに なんでも。



トニョ。じてんしゃで イナズマびんの はいたつを する。じっぷんで とどかなければ タダ。



フローラ。うんがどおり9ばんちの にわし。いしには サインしない。



ベラさん。フローラの いえの となりの ドラゴンの いえで、ドラゴンの せわを している。パンくずは ベラさんと くらして いる。



マラさん。「ありえない はいたつ」の てんしゅ。まじょの ぼうしを かぶって いる。いうより ずっと おおくを しって いる。

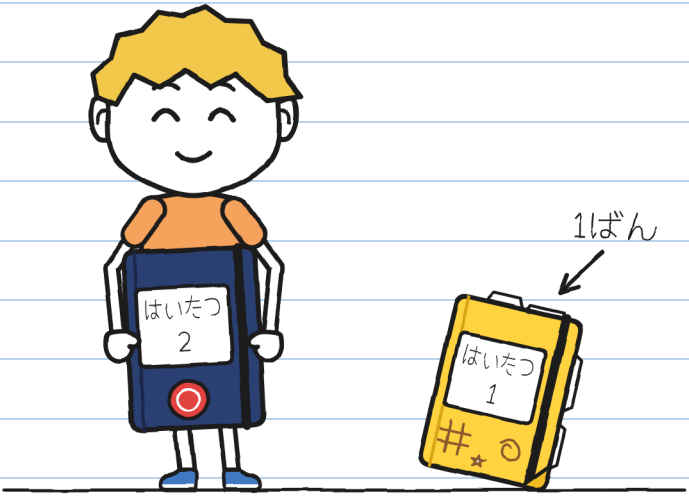


R.は、だれにも とどけられない にもつを おくるひと。その なまえを だれも いわない。

グニの
はいたつノート2

公式。

「公式」ってことは、わたしが先に読むってこと。公式に。 —J.



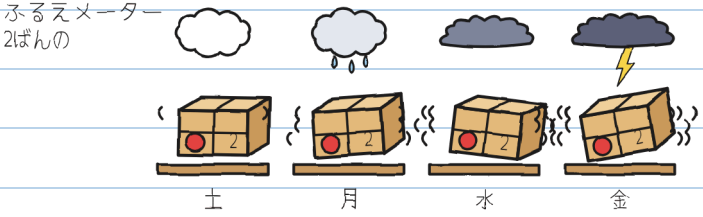
ノート1はいっぱいになってしまった。これは店のマラさんが、表紙に店のはんこをおしてくれたものだ。公式のノートに絵をかいてはいけないそうだ。さあ、どうかな。

第 1 章

あらしの ハンター

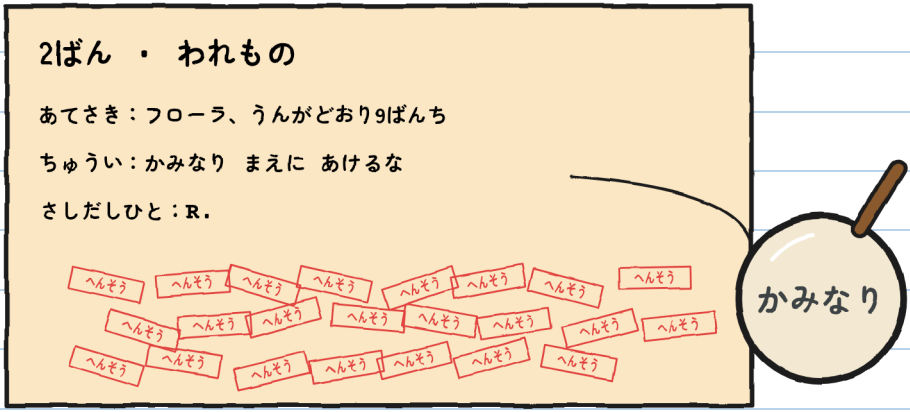
マラさんの店には、ふるえている荷物がある。先週の土曜日から、日に日にひどくなっている。
さわらないことに決めた。
最後にフリータとぼくがとどけたのはたまごで、それが今はパンくずというドラゴンの子になって、ぼくのまねを何でもする。

店の中、ぼくの家のむかいには、もどってきた荷物があと十九こある。そしてそのうちの一つは、待つのにあきたようだ。



こわくてふるえているんじゃない。あらしが来るからふるえているの。土曜日の午後六時に。天気予報（てんきよほう）は六回たしかめた。 —J.

もどってきた荷物は、うけとった人がきえないインク（フリータのみどりのペンのような）でラベルにサインをしないと、夜明けにとんでたなに帰ってしまう。送り主はいつも同じ人：R.



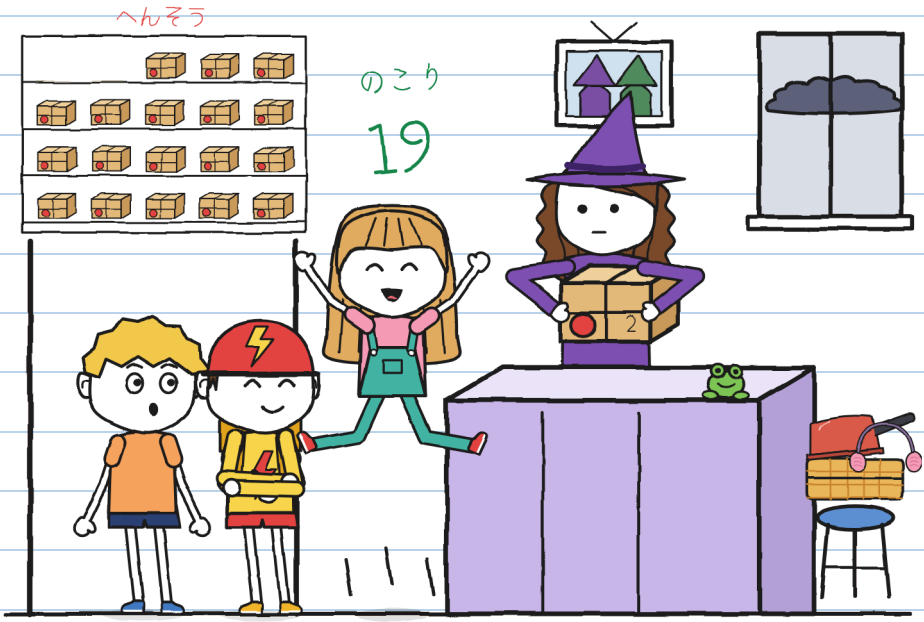
2番の荷物には、「へんそう」のはんこが二十三こおされていた。

二十三。二回数えた。 —J.

「二十三回、わたしが運んだ」とマラさんは言った。
「でもあらしの日は一度もなかった」

土曜日の十時、マラさんは2番の荷物を両手でかかえて、カウンターでぼくたちを待っていた。トニョもいた。土曜日は、三人とも1番の荷物をかってにとどけたばつで、店の手つだいだ。

「これは」とマラさんは言った。「あなたたちがとどけるのよ。今日の午後に」



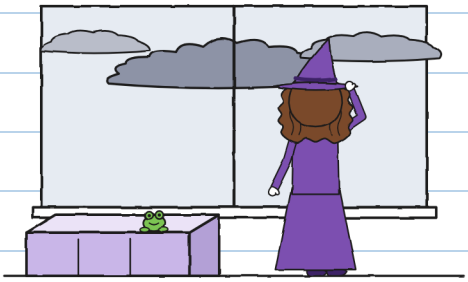
フリータは「のこり19」のふだにさわりそうなほど大きくジャンプした。

マラさんは三つのじょうけんを出して、指を折って数えた：

1. 五時、あらしが来る前に出発して、すぎるまでフローラの家にいる。
2. 家族はもう知っているし、フローラも知っている。
3. きまりはラベルのとおり：かみなり前にはあけない。しかも頭の真上に来たかみなりで、遠くのはノーカウント。

「マラさんは行かないの？」とフリータが聞いた。

「わたしはここにやることがある」とマラさんは言って、ショーウィンドウの向こうの空を見た。空はどんどん灰色(はいいろ)になっていく。



やることってなに？ ―J.

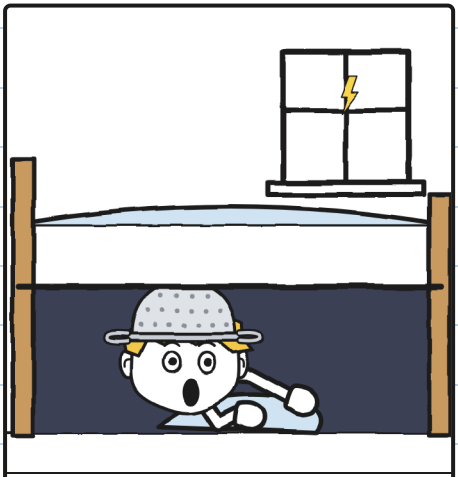
そこでフリータがぼくを見た。
「グニはあらしがすき？」

ぼくは、そんなふうに見つめられたときだれもが言うことを言った：

「だいすきだよ。前に住んでいた町では、プロのあらしのハンターだったんだ」



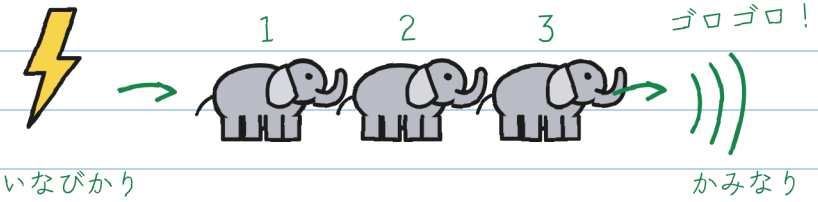
いった こと



ほんとうに おきた こと

ベッドの下のプロだね。 —J.

フリータはぼくのノートに、ことわりもなくあらしの数え方を書いた。いつものことだ：



ぞう1とう、ぞう2とう、ぞう3とう……

ぞう1とう＝1びょう

ぞう3とう＝1キロ（だいたい）

ぞう0とう＝まうえ！

↖ これが ラベルの かみなり。
とおくの かみなりでは あかない。

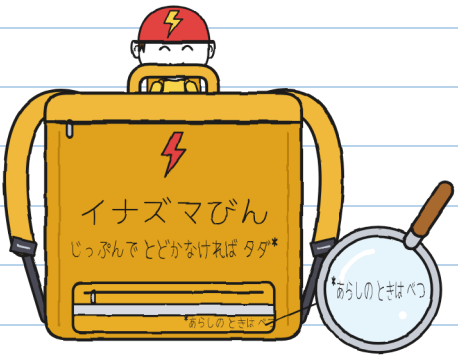
ぞうが おおい ほど、その いなびかりは とおくに おちた。

かみなりが きこえたら、とおくても：なかへ！

知っていることは、こわさがへる。 —J.

ぼくは何も数える必要がなかった。あらしはだいすきだから。でも念のため、書きとめておいた。

トニョはぼくのかたごしにラベルを読み、リュックの小さな字を見せた。
「イナズマ便は、あらしの日にはとどけない」
「まだあらしじゃないでしょ」とフリータ。
トニョは字をもう一度たしかめた。「まだ」とは書いてなかった。そしてついてきた。

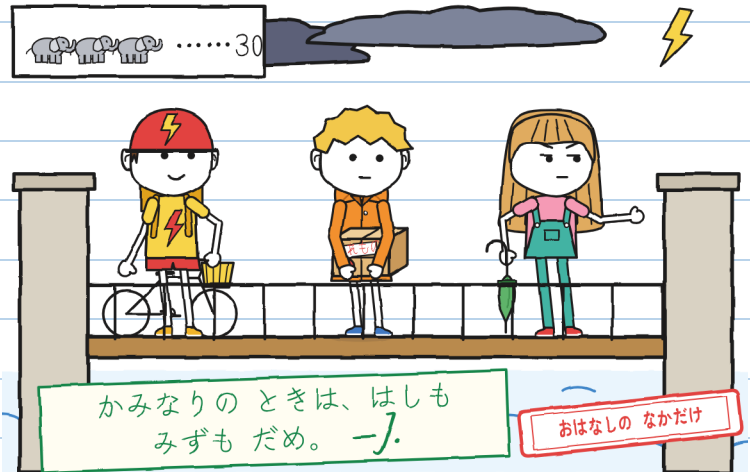


小さい字、大きい言いわけ。 —J.

五時に家へ行き、レインコートを取ってきた。
「オレンジのを着ていきなさい」とお母さんはドアから言った。「本当に行くの？ かみなりが鳴ると……」
「いってきまーす、お母さん！」

「鳴ると……」って？ —J.

ぼくたちはおおはしをわたった。夜になると船を通すために上がるはしだ。空はどんどん黒くなっていた。はしのまん中を通るとき、フリータは水に手をふってあいさつした。まじめくさった顔で：うんがとフリータはなかがよくない。



遠くで、空が光った。フリータは何も聞こえないまま、ぞうを30とう数えた。

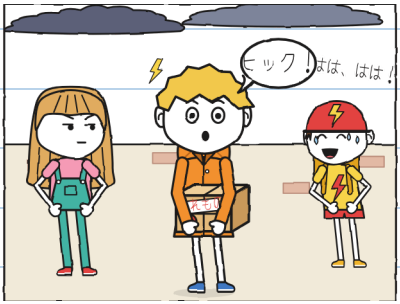
ゴロゴロ。

「あの稲光（いなびかり）は、十キロくらい先に落ちたのね」とフリータは言った。「天気予報（てんきよほう）だと、あらしは六時ごろ」

「かみなりが鳴った！」とトニョが言った。「もうあけてもいい？」

「あれじゃ荷物(いなびかり)はあかない」とフリータは言った。「ラベルのは、稲光と同時に鳴るやつ：ぞう0とう。でももう聞こえるから、それで十分：中にかくれよう！」
うんが通りまで走った。ぼくはかみなりなんか聞こえなかったふりをした。

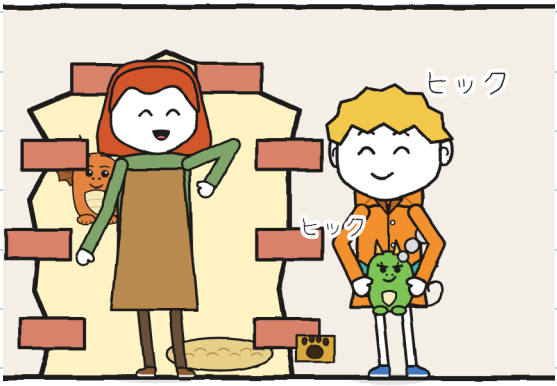
「今の、ヒック？」とフリータが聞いた。
「ちがう」とぼくは言った。「ヒック！」



小さいころからそうなんだけど、かみなりのときだけ：かみなりが鳴るたびにしゃっくりがつづけて出て、三秒に一回。あらしが真上に来ると止まらない。こわいんじゃない。体がぼくに相談もなしにやることだ。

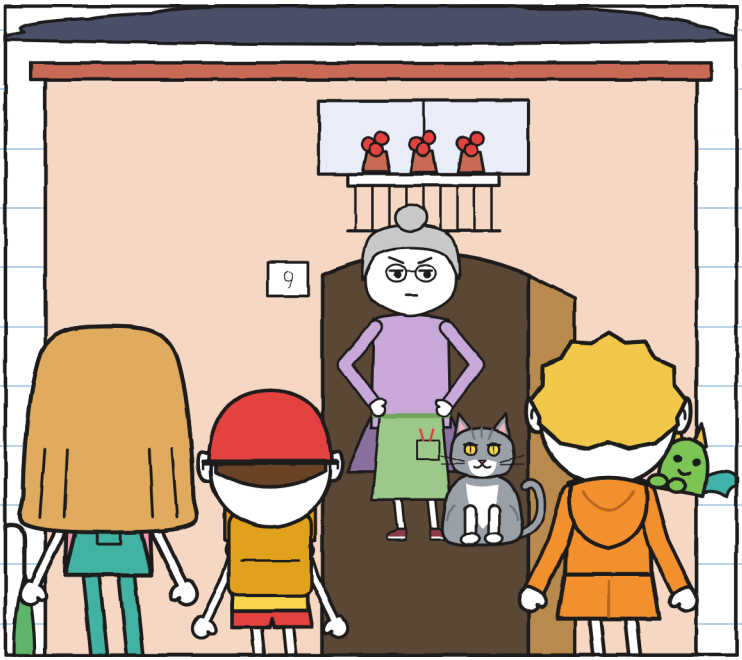
それをこわいって言うの。 —J.

ベラさんはもうドラゴンの家の入り口に立っていた。フローラの家のとなりだ。パンくずをだいて。土曜日は、パンくずはぼくとさんぽだ。
「フローラの家までよ。はじめてのあらしなの」とベラさんは言って、ぼくのうでにパンくずをのせた。「グニのまねを何でもする。気もちまで。おびえても、引っぱっちゃだめ：しがみつくから。あらしがすんだら、へいを三回たたいて。すぐさがしに行く」
「ぼくは何も感じないよ」とぼくは言った。「あらしはだいすきなんだ」



遠くでかみなりが鳴った。ぼくはヒック。パンくずもヒックと言って、はなからけむりを出した。
「すぐ中に入りなさい」とベラさんは言った。

フローラの家は、ゼラニウムの家だ。二週間まえの土曜日、ぼくたちがドラゴンの家の入り口をさがしていたとき、ベランダからぼくたちを見ていた女の人の家。あの入り口は、かべみたいに見える。



フローラは、ぼくたちがノックする前にドアをあけた。箱を見た。空を見た。パンくずを見た。
「ベラのところの子ね。わたしのシダを焦がさないでよ」と言った。「入りなさい、雨が来るよ。でも先に言っておくけど、わたしは石にはサインしないからね」

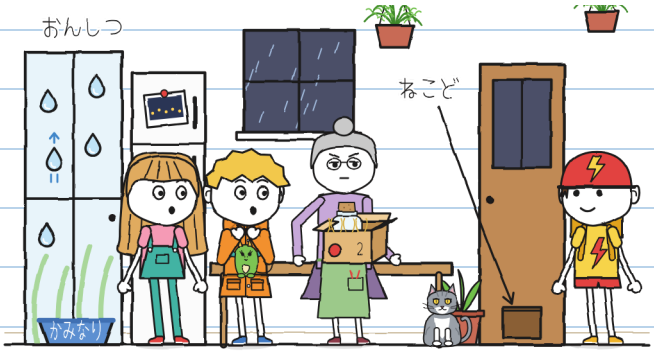
第 2 章

カミナリ！

フローラの台所は、ゆかにも天井（てんじょう）にも植物がいっぱいだ。おくのガラスのドアは温室へ、うしろのねこ戸のあるドアは庭へ通じている。トニョは雨なので自転車をろうかに入れた。

温室のガラスには、かいた水のつぶがあった。一つがわくまでのぼり、次の一つがそれをおいこした。

「R.のまほうのガラスさ。ほしいときだけ雨を通して、かみなりは通さない」とフローラ。

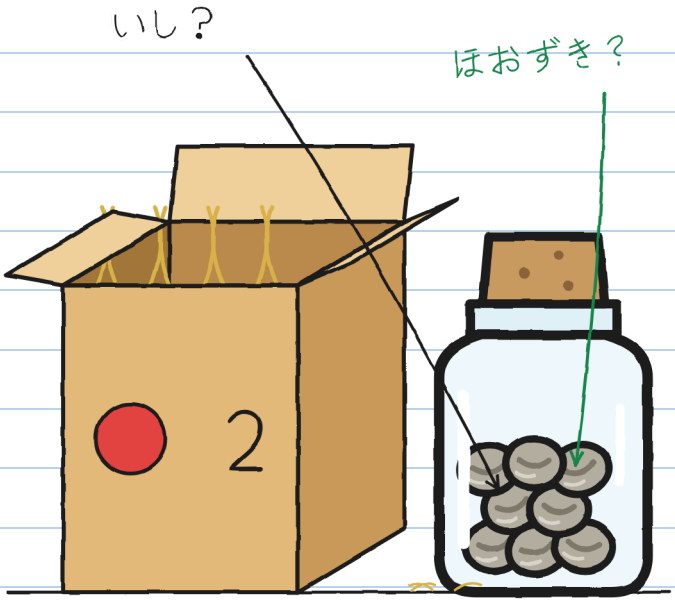


ぼくは2番の箱を見た。R.も、ちゃんととどけられるものがあるらしい。

フローラは箱をテーブルに置いて、聞かずにあけた。中には、わらにうまって、灰色の小さな玉が八つ入ったガラスのびんがあった。

「かみなり前にはあけちゃだめって書いてある！」とフリータがさけんだ。

「あけたのは箱で、びんじゃないよ」とフローラは言った。「中に何が入っているかはもう知ってる。R.はほおずきをくれるって言って、石をよこすの」



「ほおずきってなに？」とぼくは聞いた。

フローラは古い写真を見せた：夜のうんがぞいの道、岸に小さなあかりがずらり。



「稲光（いなびかり）の光をためる植物よ」とフローラは言った。「夜になると、それを返すの」

「R.が植えていたの？」

「もう目ざめたたねを持ってきたの。わたしは土を入れるだけ。ねむったたねは見たことがない」

「ほおずきは？」

「一つずつ消えていった。R.は来なくなった。今はこれをよこす」

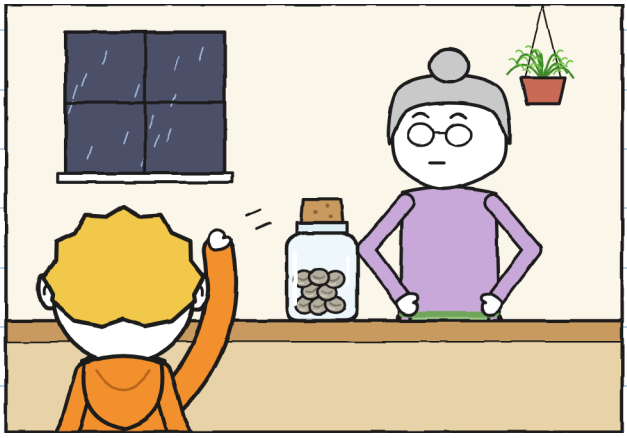
だからうんがは夜にあんなにくらい。だからいたのはしはあんなにこわい。うんがをわたるあの一まいの板が。

こわかった。わたしはとくに：くらやみでわたった。 —J.

「R.はいつもやくそくをまもる」とフローラは言った。
「おそいけどね。でもこれだけはちがう。このびんは二十三回とどいて、二十三回、石だった」

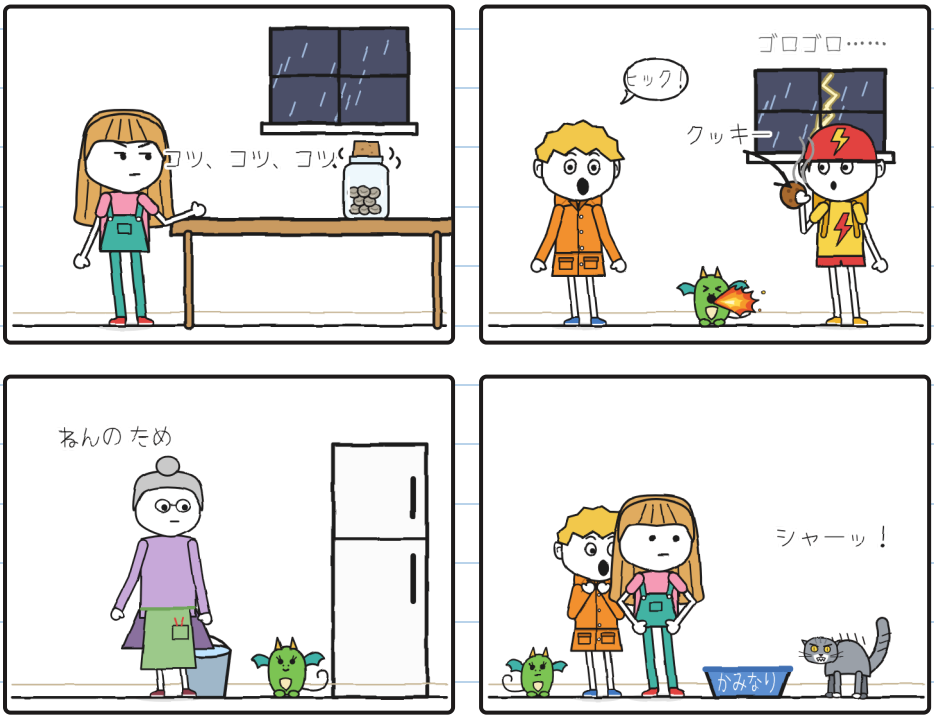
ぼくはラベルを思い出した。注意書きまで、ぜんぶおぼえていた。
「フローラさんは、かみなりを待ってからあけたことがありますか？」とぼくは聞いた。

フローラは、水はぬれるかと聞かれたかのような顔でぼくを見た。
「わたしはだれも待たないよ」と言った。「かみなりだってね」



フローラのねこはカミナリという。えさ入れに名前が書いてある。雲みたいに灰色(はいいろ)で、のどをゴロゴロ鳴らす音は、ほんもののかみなりだ。

あらしを待っているあいだ、台所ではいろいろおきて、何もおきなかった：



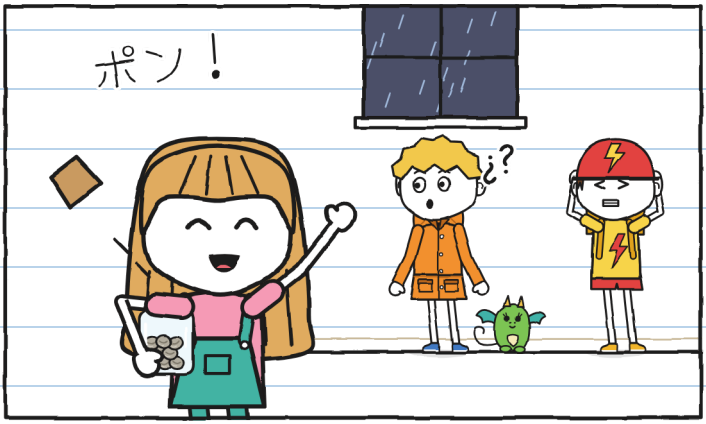
かみなりでいちばんいやなのは、待つこと。 —J.

びんはテーブルの上で、だんだん大きくチリンチリンと鳴った。フリータは小声で数えた：「ぞう12とう」。「9とう」。
テーブルの下では、あしがべつの数を数えていた。

「ゆかに穴があくよ」とぼくは言った。
「数えてるの」
「だったらあしに言って。先に行ってる」
そのときパンくずがまた小さな火をふいて、カミナリはねこ戸から庭へとび出した。フローラはうしろのドアをあけ、戸口から大声で呼んだ：
「カミナリーーー！」



そしてフリータがびんをあけた。



「かみなりが鳴った！」とフリータは言った。

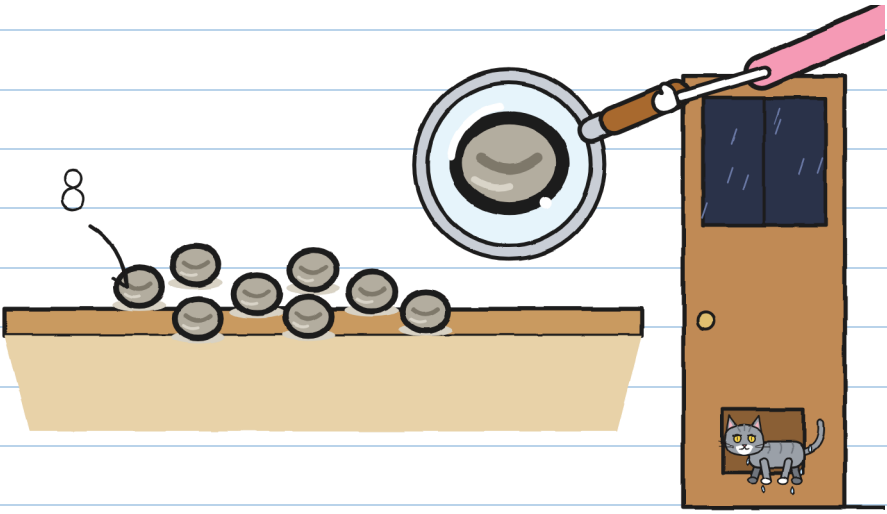
かみなりは鳴っていなかった。さけんだのはフローラだ。カミナリはねこの名前なのだ。

「カミナリ！」って聞こえたの。まさに待っていた言葉よ。それがねこの名前だなんて、だれも教えてくれなかった。 —J.

それを17ページにはった。

そのページはあとで読んだ。 —J.

あけると、びんは鳴りやんだ。中には灰色(はいいろ)の玉が八つ入っているだけで、つめたくてうごかない。フリータは玉をテーブルに出して、虫めがねでのぞいた。
「すじがあるね」とフリータは言った。「とじた目みたい」



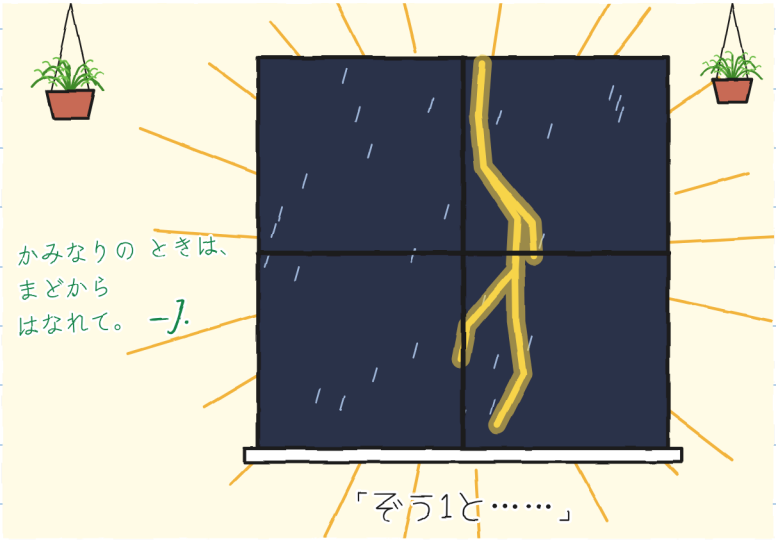
カミナリがひとりでねこ戸からびしょぬれでもどり、フローラはドアをしめた。
「石ね。いつもどおり」と言って、フリータを見た。

フリータの顔は、シャツと同じ色になった。

「ねむってるんだ」とぼくは言った。「石じゃなくてたねだよ。だから『かみなり前にあけるな』って書いてある。もしかしたら、かみなりが起こしてくれる。ガラスがふるえるくらい大きいやつが」

フローラはだまった。それから言った：
「たねなら、しょうめいしてみなさい」

外はもう夜みたいにくらかったが、まだ六時だった。
稲光（いなびかり）。フリータは数えはじめた：



そしてついにほんものが来た。



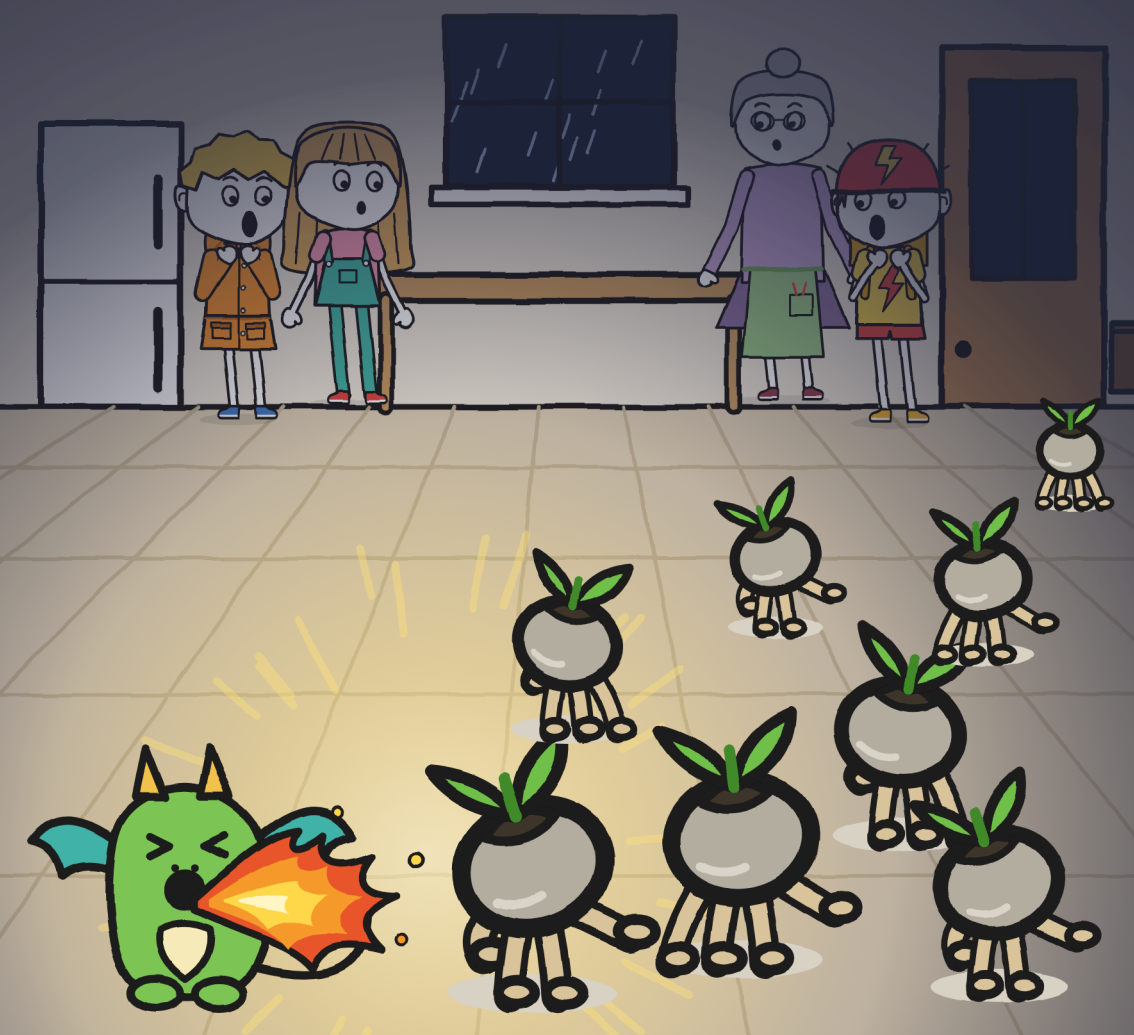
かみなり(いなびかり)が稲光と同時に来た。あらしは真上にいる。
テーブルも、コップも、ガラスもふるえた。

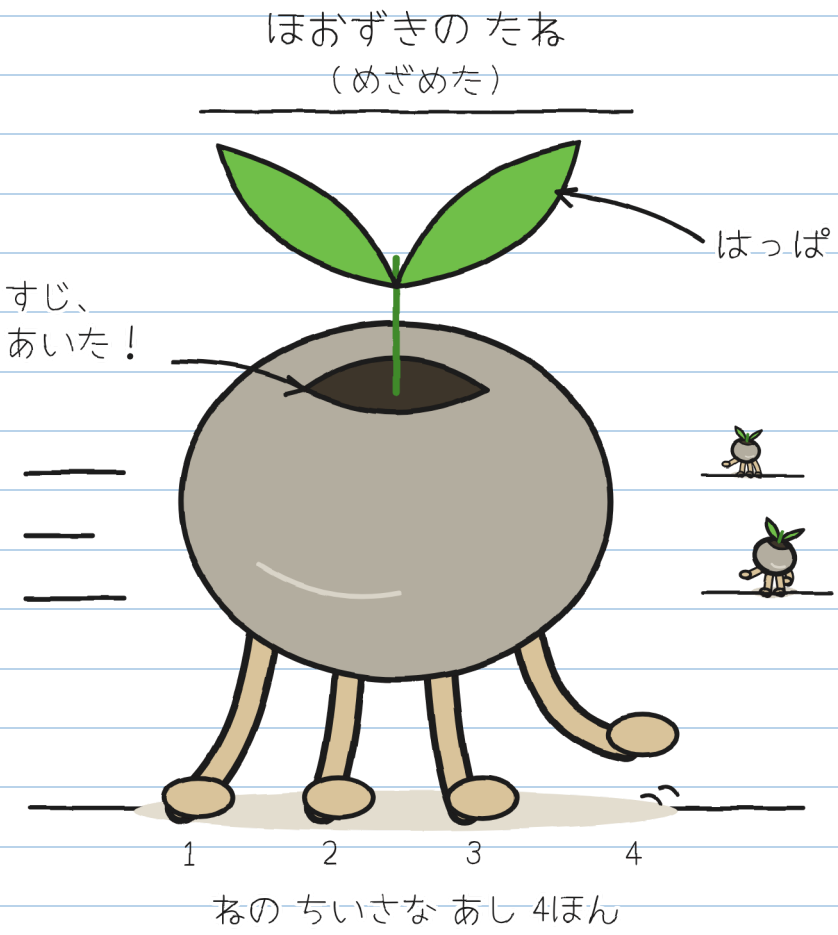
そしてでんきがきえた。



ぼくはヒック。パンくずもヒックと言って、ボウッと大きな火をふいた。一秒のあいだ、台所ぜんぶが見えた。

テーブルはからっぽだった。





石に足があった。

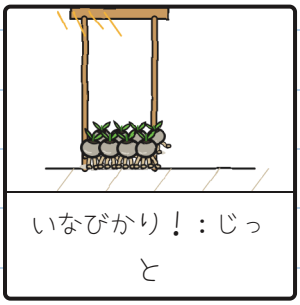
それと、いそいでいる。 —J.

第 3 章

みないと うごく

くらやみの中で、小さな雨のような音がした：トト、トト、トト。また稲光（いなびかり）が光ると、玉はさっきより遠くにあった。そしてじっとしていた。ぴたっと。何もしていないふりで。

玉ははやく走ったが、稲光（いなびかり）が光るたびに止まった。稲光（いなびかり）はたくさんあった。ぼくはテーブルの下から見ていた。くぎにかかっていたフローラのざるをかぶって。うちでも、かみなりが鳴るとかぶるんだ。



いなびかり！：じっと



くらやみ：はしる



いなびかり！：じっと。もっと とおく。

だるまさんがころんだ。たねで。 —J.

フローラがライトをたねに向けると、たねはその場にくぎづけになった。別のたねに向けたとたん、さいしょのはすきを見てにげた。

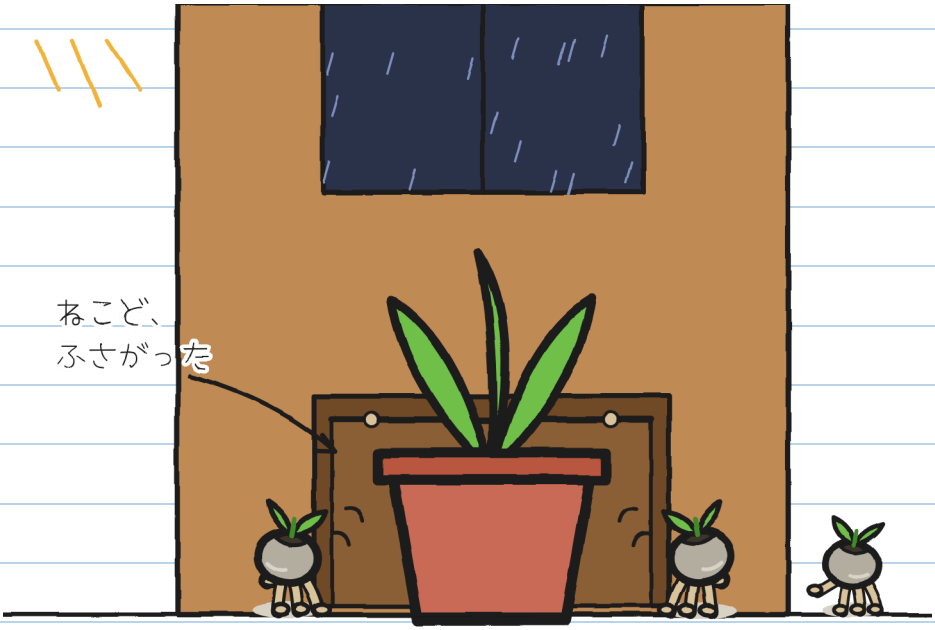
「たねだ！目ざめてる！」とフローラはさけんだ。



フローラは、はじめて台所を何かが走るのをよろこんでいるように見えた。
「もう一つライトがいる」とぼくは言った。
「ほかの方法を考えなさい。ライトはこれしかないよ」

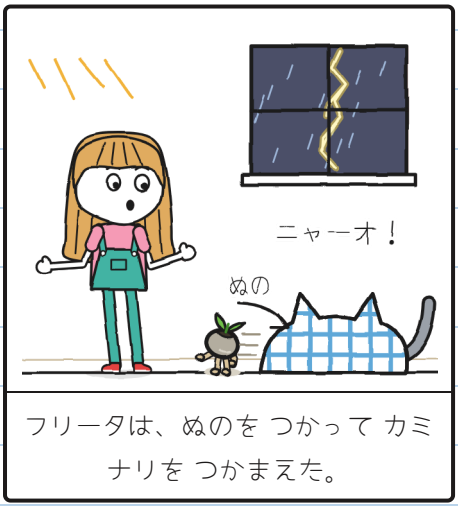
たねは八つで、ライトは一つ。二つめのたねもにげた。

たねはみんなねこ戸のほうへ向かった。
「あらしのぬれた土をさがしているのよ」とフローラは言って、大きなはちを前においた。「家の土は水道の水の土だけ。温室もそう。それじゃだめなの。外には土がほとんどない。石だたみと小道とうんがだけ。出たら、雨で水にながされる」



ねこ戸はふさがったが、たねは台所じゅうにちらばった。くらやみで、しかも台所にはかくれる場所が百もある。

あらゆることをやってみた：



フリータは、ぬのを つかって カミナリを つかまえた。



トニョは てで：カミナリが トニョを つかまえた。



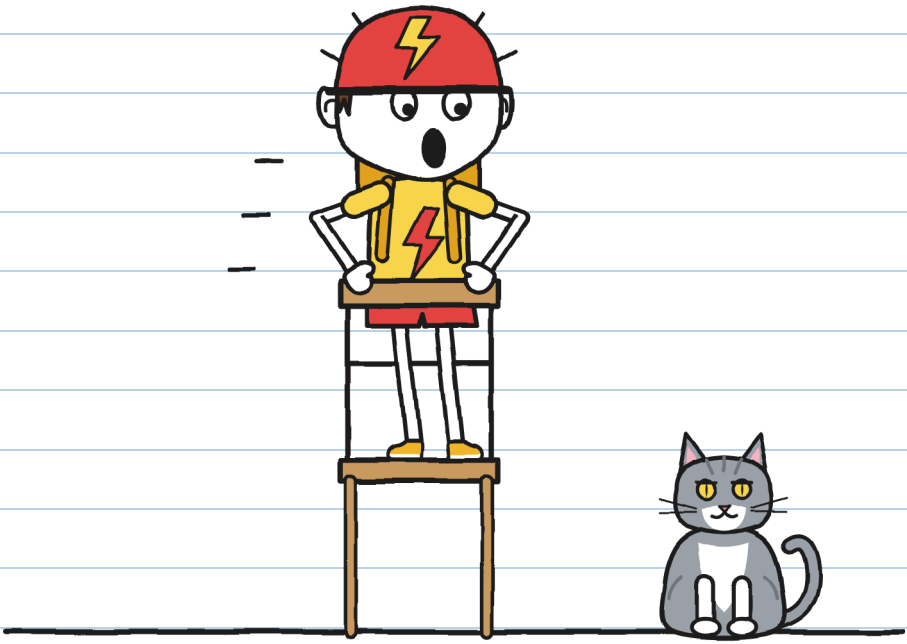
パンくずは、ひで：ひとつ！



フローラは、ライトで：ふたつ！

カミナリもおいかけた。くらくてもよく見える。ぼくたちは、見えない。

トニョはあらしはこわくない。トニョがこわいのは、ねこだ。



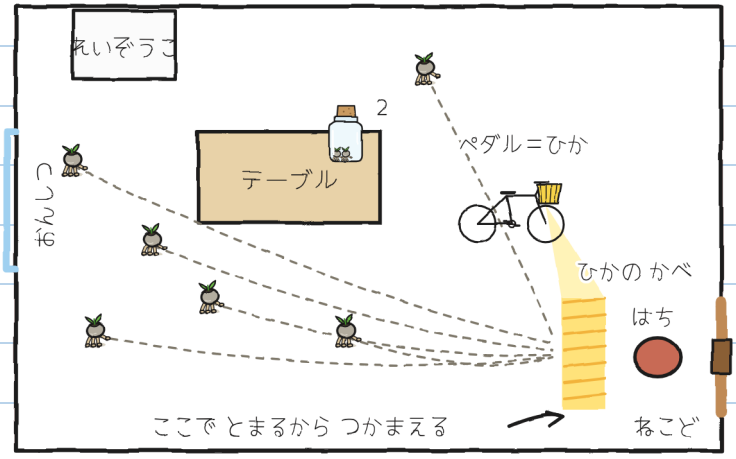
「ねこじゃないって！」とフリータが言った。「カミナリだよ！」

「もっとこわい！」

びっくりが二つ、名前はひとつ。 —J.

ぼくはまだテーブルの下で、ざるをかぶったままだった。稲光（いなびかり）が光るたびにゆかぜんぶが見えて、あることに気づいた：たねは台所をぐるぐる回っていたが、いつもねこ戸のはちをおしにもどってきた。

ぼくたちはおいかけなくていい。どこへ行くかわかっていた。



ぼくは地図をかいた。

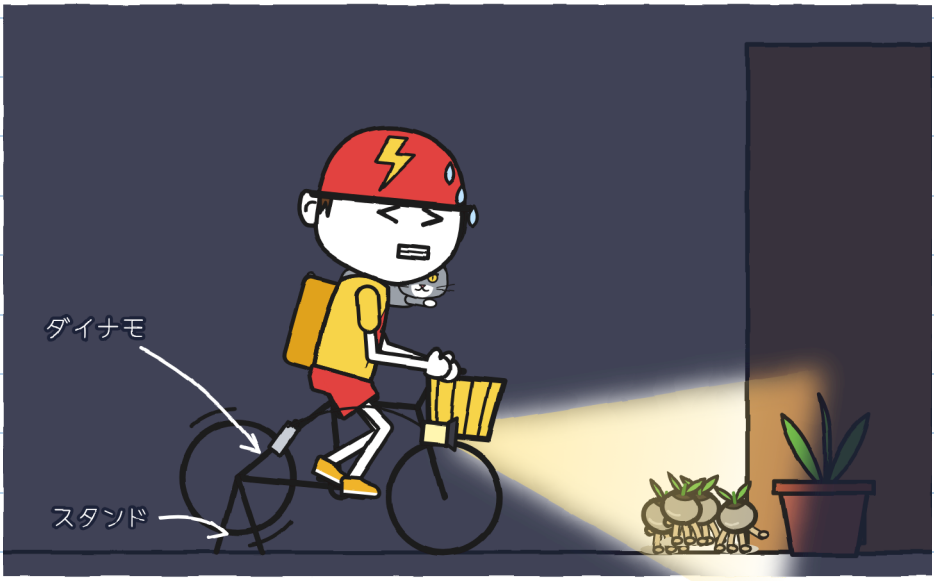
「トニョ、ライトはペダルをこぐとつく？」

「もちろん」

「じゃあ、今日は光をはいたつして」

自転車をスタンドで立て、ライトをねこ戸に向けた。イナズマ便のダイナモは後ろの車輪にぴったりついていて、回れば光る。そしてトニョがこいだ。

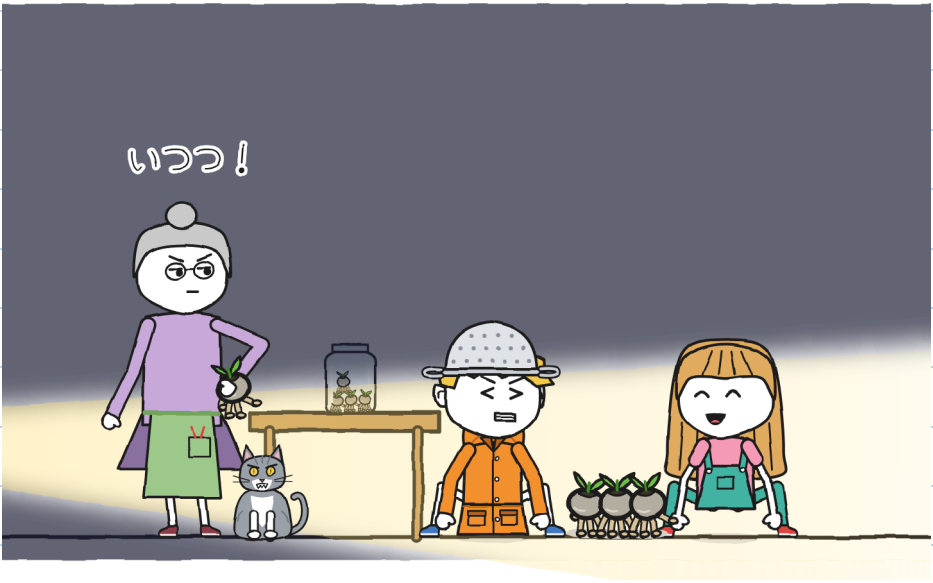
トニョはいままでこいだことがないくらいはやくこいだ。とくに、カミナリが上にとびのったときは。



ついにイナズマ便がやくに立った。 ―J.

たねは光のところへ来るとつま先立ちで固まって、見つかったみたいだった。ぼくたちは一つずつびんに入れた。三つ。四つ。

カミナリも口で一つつかまえて、フローラはそれを指二本で取り上げた。
「五つ！」と言った。



六つ。

フローラは一つもにげないようにびんにふたをして、ぼくたちを手つだおうとかがんだ。するとカミナリがテーブルにとびのって、びんをたおした。

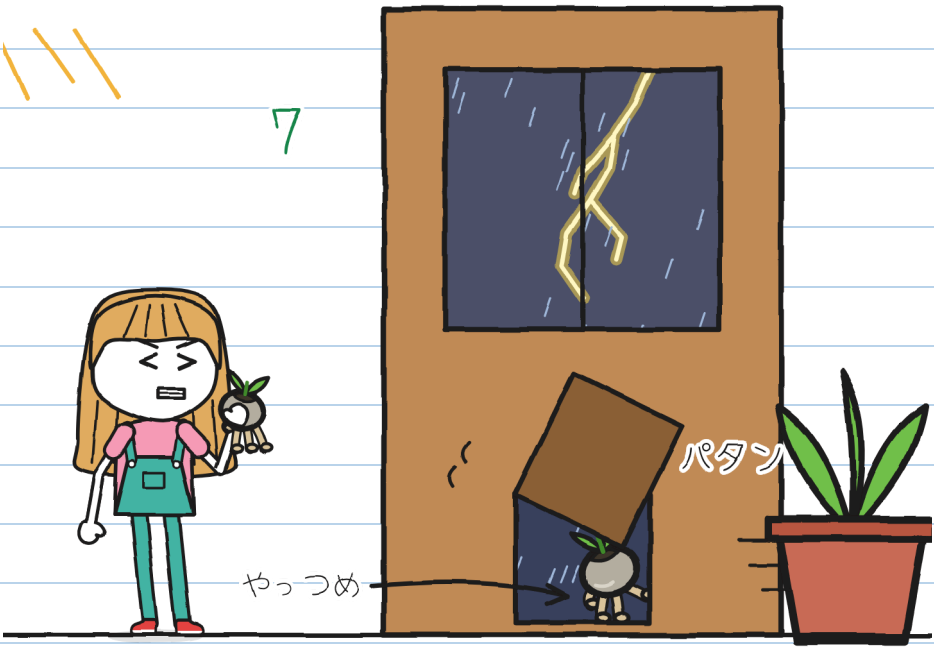


トニョはゆかにつく前に空中でつかまえた。
「イナズマ便」とトニョは言った。「一秒でとどけなければタダ」

でもトニョはこぐのをやめていて、ライトが消えた。
カミナリを止められる人はいない：ねこ戸へまっしぐらだ。

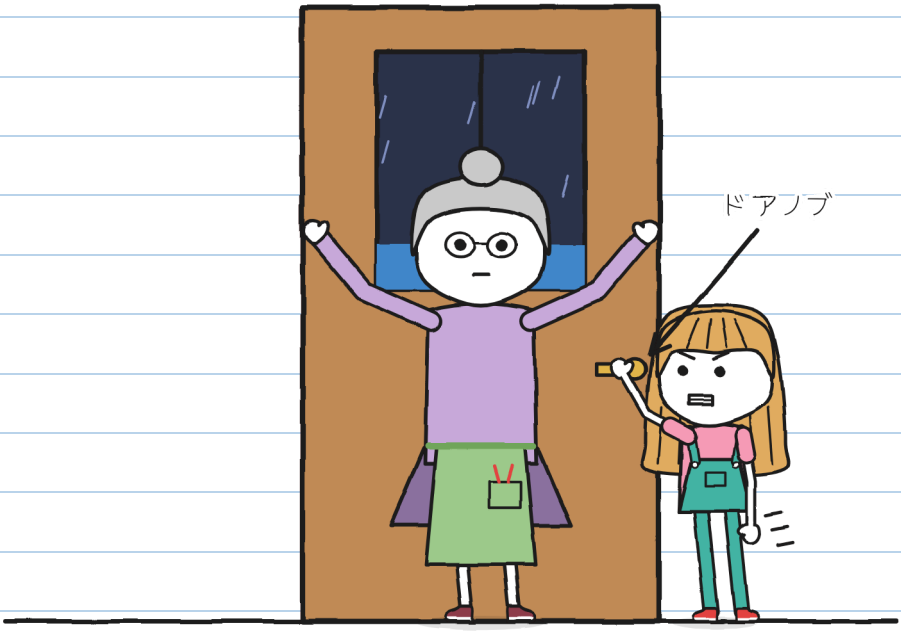
くらやみで：トト、トト、トト。カミナリがはちをおした：ゴトッ。そしてねこ戸がパタン。

また稲光（いなびかり）が光ったとき、ゆかにはたねがただ一つのこっていて、フリータがつかまえた。七つ。



八つめはねこ戸から出ていってしまっていた。

「取りに行く！」とフリータは、もうドアノブに手をかけて言った。
「雷が落ちるときは、この家からだれも出さないよ」とフローラは言って、ドアの前に立った。話し合うつもりはなさそうだった。



フリータは言いかえさなかった。でもドアノブもはなさなかった。
しばらくして、ねこ戸がパタン。びしょぬれのカミナリだった。八つめはなし。

「稲光（いなびかり）……ぞう1とう、ぞう2とう」
ゴロゴロ。
「2とう」とフリータは数えた。「まだすぐ近くだ」

「じゃあ今から植えよう」とフローラは言った。「あらしが行ってしまう前に。それもくらやみで」
「雷（かみなり）の中で？」とフリータは聞いた。
フローラはガラスをのぼる水のつぶをたしかめた。
「まほうはまだ効（き）いている。雷（かみなり）は外にのこる。わたしたちは中に」



それからパンくずを見て、「くらやみで」とくり返した。

パンくずがぼくのほうを見た。そしてヒック。

第 4 章

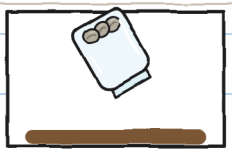
ヒック

フローラがほおずきの植え方を教えてくれた。R.に教わったとおりだ。ぼくは公式ノートの文字で書いた：

ほおずきの うえかた

1. 

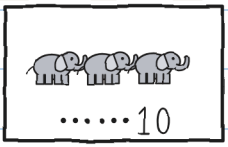
あらしの ぬれた つち。
（みずみちの みずの つちは だめ）

2. 

つちの うえで びんを あける。
（その まえに あけると、にげる）

3. 

ぜんぶ くらやみで：たねは ひとりで つちに もぐる。
（じぶんで うめると、めが でない）

4. 

あらしが すぎる まえに：
ぞうが 10とうより おおいと、
つぎの あらしまで もう うわらない。

目ざめさせるにはぞう0とう。植えるには10とうまで。11とうでねむる。 —J.

フローラは天井（てんじょう）のハンドルを回した。まどはあかなかった：かいた水のつぶがのぼるのをやめて、ガラスを下へおりはじめた。

雨は何もないかのようにガラスを通りぬけて、花だん、つまり土がいっぱいの長いテーブルにふった。

「ぜんぶ花だんへ。ゆかには一てきもだめ」とフローラは雨に言いつけた。



このガラスはお話の中だけ。本当のあらしでは、温室にはぜったい入らない（76ページ）。 —J.

「あらしのぬれた土よ」と言った。「さあ、ぜんぶくらやみで」

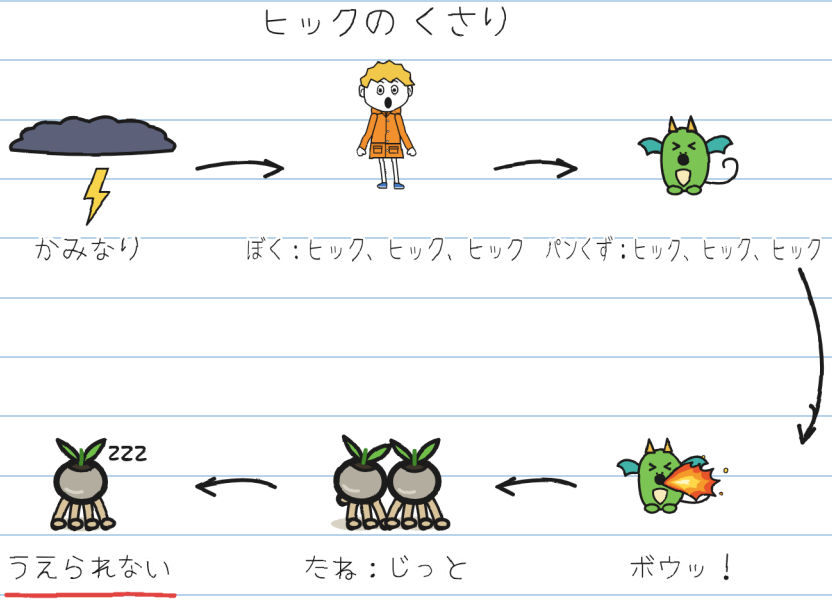
でもパンくずはもう中にいた：ドアをあけたとき、だれにも見られずに、フローラの足の間をすりぬけて。花だんの下の、はちの間にいた。

フローラはそっと引っぱった。パンくずは四本の足ではちにしがみついた。ベラさんがぼくたちに言っていたとおりだ。



台所でぼくがヒックをするたびに、温室でパンくずが火をふいた。

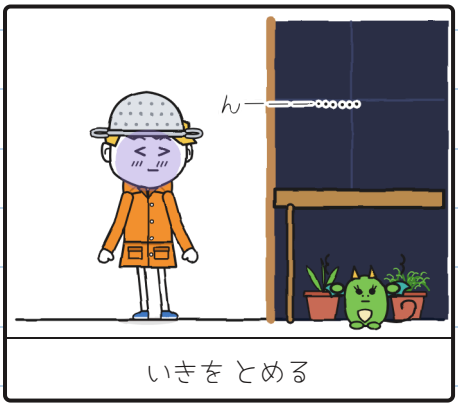
わかるようにかいた：



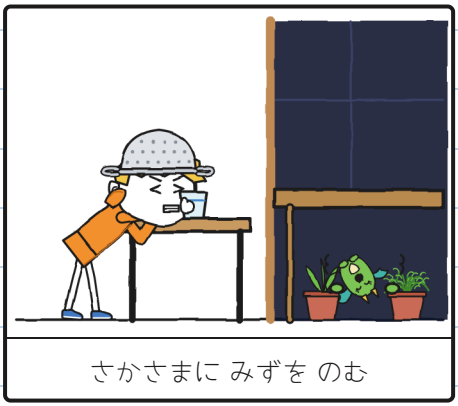
台所では、ヒックがぼくたちを助けた：火、じっとするたね、つかまるたね。温室ではぼくたちをほろぼした：三秒ごとに火が出て、たねが土にもぐるのにいるくらやみの時間が、いつもなかった。

くさりを切らなきゃ。いちばんかんたんな輪はあなた。あいをこめて。 —J.

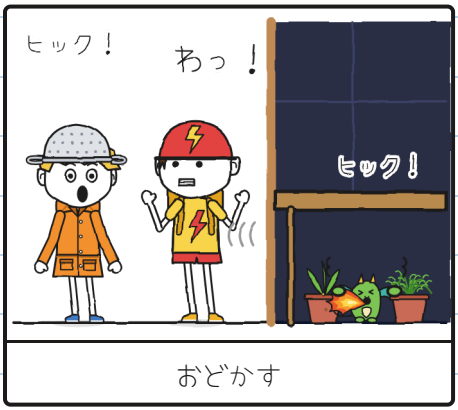
しゃっくりのおまじないをぜんぶためした：



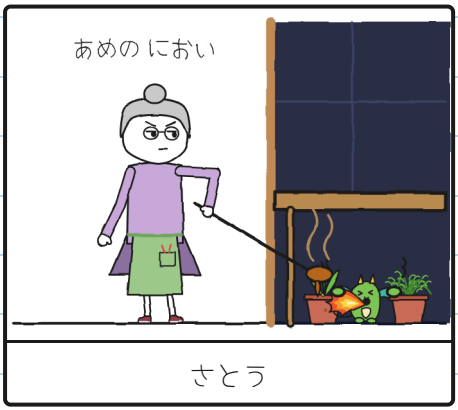
いきを とめる



さかさまに みずを のむ



おどかす



さとう

パンくずははちからはなれずに、ひとつずつぜんぶまねした。

おまじない：ゼロ。ヒック：たくさん。 —J.

「ぞう4とう。5とう」
かみなりが鳴った。フリータは、あの稲光(いなびかり)はさっきより遠くに落ちたと言った。

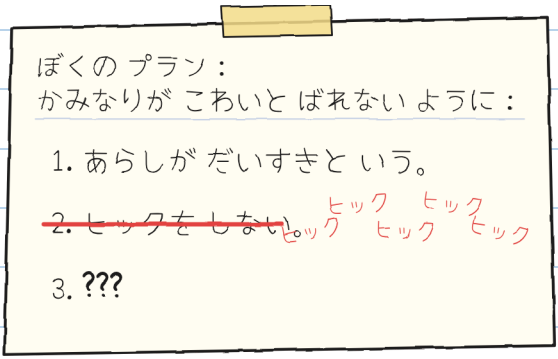
七つのたねがびんの中で、出口をさがしてぐるぐる回っていた。ぼくのヒックは止まらない。



「11になったら？」とぼくは聞いた。
フリータはガラスにくっついた小さな足を見た。
「また石ね」
それからぼくを見た。

「パンくずは、グニのこわさをまねしているの」とフリータは言った。
「ほかのものをまねしてもいいのに」とぼくは言った。
ぼくはヒックした。すると花だんの下で火がボウッと出た。パンくずは考えを変えるつもりはなさそうだった。
「台所に出してあげたら？」とぼくは聞いた。
「しがみつくよ。見たでしょ」
フリータは声をひそめた。
「まず、そばにいてあげて」

こわさをなおす方法はなかった。かくすプランがあった。それももううまくいかなくなっていた：



3は？ —J.

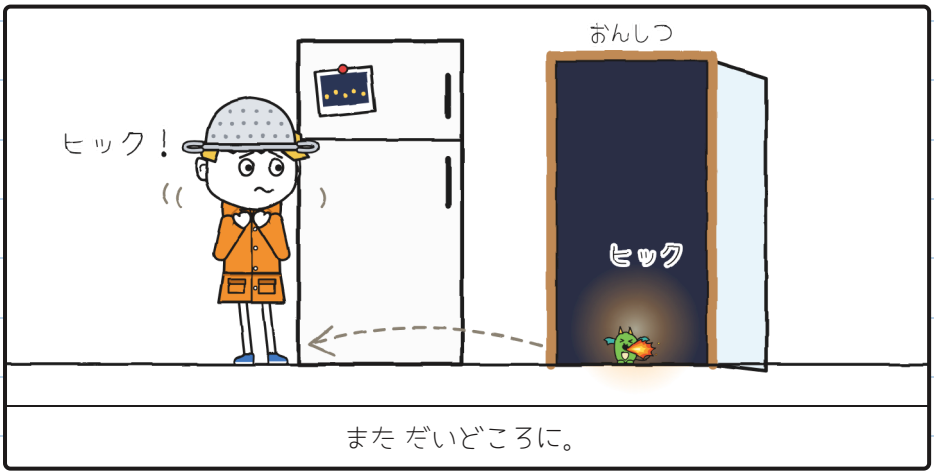
ためした。ほんとうに。



かたあしを なかに。



かみなり。



また だいどころに。

温室は、町じゅうでいちばんかみなりが大きくひびく場所だ。

入り口から上を見た。ガラスの天井ごしに、稲光と稲光のあいだに、屋根よりもずっと高いところに見えた：ベラさんのドラゴンたちが、あらしの中をとんでいる。だれも空を見ていないときに、とびに出るんだ。だからベラさんはぼくたちと来なかった：あらしのときは、ドラゴンたちの見張りにのこる。



ドラゴンたちはヒックをしなかった。

「行こう、あらしのハンター」とトニョは言った。

トニョが笑うのを待った。笑わなかった。

ざるをぬいで、フローラにわたした。フローラはざるを両手で持って、ほんもののヘルメットをあつかうように大切にした。



そしてぼくは入った。

ざるはかみなりをふせげない。こわさには、ときどききく。 —J.

中では、雨が千本のゆびでいっせいにたたくような音を立てていた。ぼくははって花だんの下にもぐった。パンくずはそこでまるくなって、ぼくと同じようにふるえていた。



ゴロゴロ！ぼくはヒック。パンくずもヒック。火がぼくたち二人をてらした。

ぼくたちは、花だんの下のあらしのハンター二人。

そのとき、入り口から、フリータが小さな声で、わらわずに言った：



「かぞえよう。わたしがいる」

第 5 章

かぞえよう、わたしがいる

そしてぼくたちは数えた。フリータは入り口から、ぼくは花だんの下で。パンくずはぼくのレインコートにふるえてくっついていた。

稲光（いなびかり）。

「ぞう1とう。2とう。3とう。4とう。5とう。6とう」

ゴロゴロ。

「6とうなら二キロくらいね」とフリータは言った。

「あの稲光（いなびかり）はさっきより遠くに落ちた。このまま中にいよう」



ぞうを6とう数えても、こわいのはまだぼくのそばにあった。

「あらしがだいすき」と二回言ってもうまくいかなかった。パンくずがまねしていたのは、ぼくの言葉じゃなくて、ぼくの気もちだった。
パンくずがぼくを見た。今度は言いわけをさがさなかった。

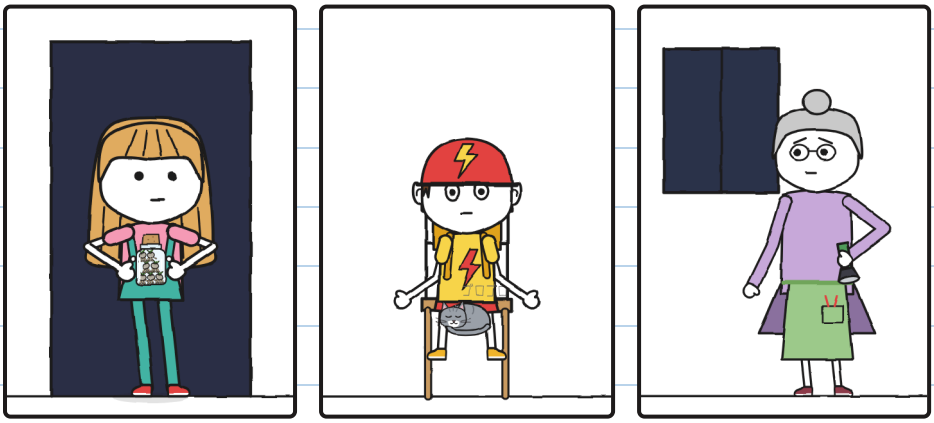


「かみなりがこわいんだ」

「知ってる」とフリータは言った。「今朝、6ページにかいていたでしょ。待っていたの」

「おれはねこがこわい」とトニョは言った。ひざでカミナリがねむっていて、動く勇気もなかった。

「わたしは、来ないものを待つのがこわい」とフローラは言った。「だから、これまではとどくとすぐびんをあけていたのよ」



わたしははし。それは知っていたでしょ。 —J.

だれもわらわなかった。雨は同じようにふりつづけていたが、花だんの下で、ぼくはもうひとりじゃなかった。

ぼくはゆっくりいきをした。パンくずもゆっくりいきをした。



稲光（いなびかり）。ぼくたちはいっしょに九つまで数えた。ゴロゴロ。

そしてヒックは出なかった。そのかみなりでも、次のでも。

「今！」とフローラがささやいた。

フリータはつま先で、くらやみの中へ入った。びんをぬれた土の上に置いて、ふたをあけた。それから音を立てずに入り口へもどった。

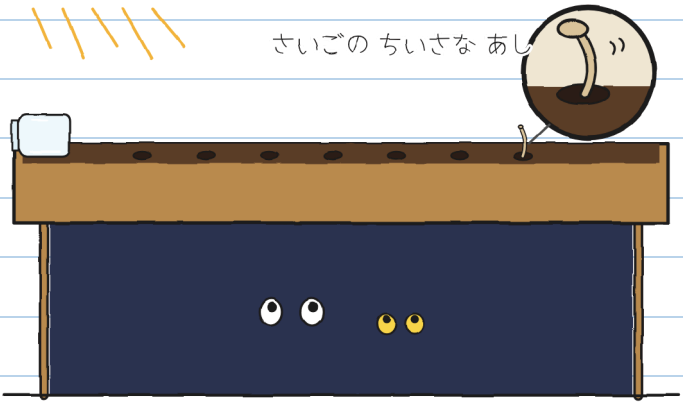


トト、トト、トト。くらやみの中、びんから何かが出てきた。

遠くで稲光(いなびかり)。ぼくたちは声を出さずに、くちびるだけでぞうを10とう数えた。ゴロゴロ。

十は、間に合う最後の数。

次の稲光(いなびかり)で、見えた：



びんはからっぽ。土に小さな穴(あな)が七つあって、いちばんさいごの穴(あな)にはまだ小さな足がのぞいていた。

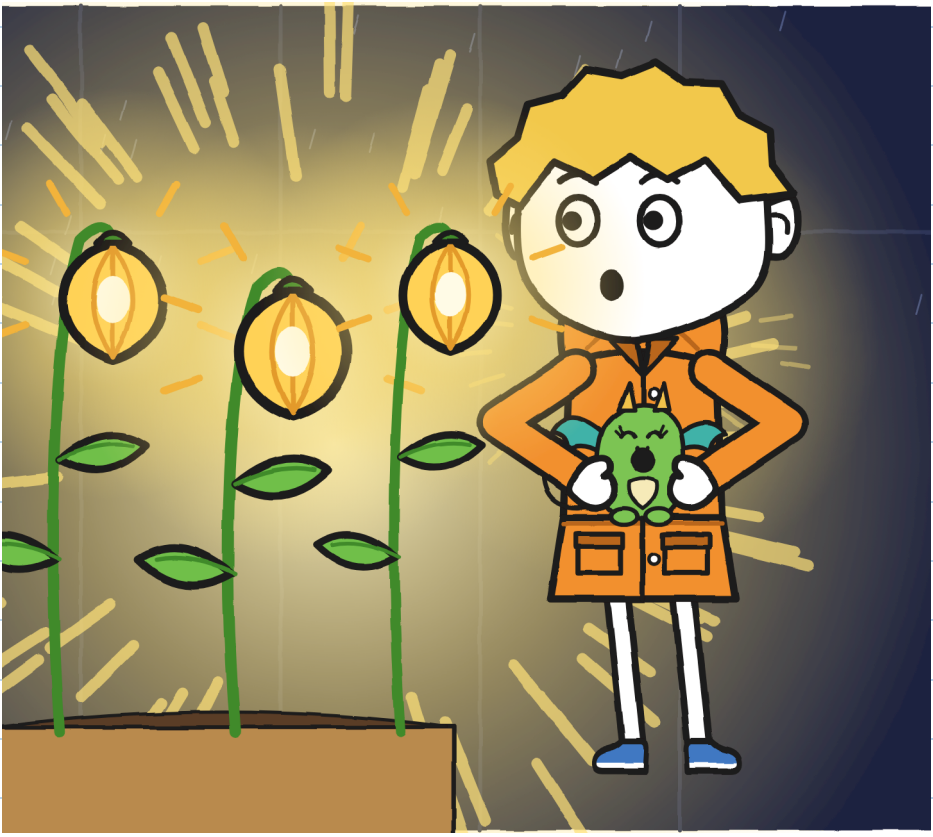
それから、しばらく何もなかった。ぼくたちだけ、くらやみの中で土の花だんを見つめて。

そのとき、さいしょのが光った。

ほおずきが七つ。どれにも稲光のかけらが中に入っていた。

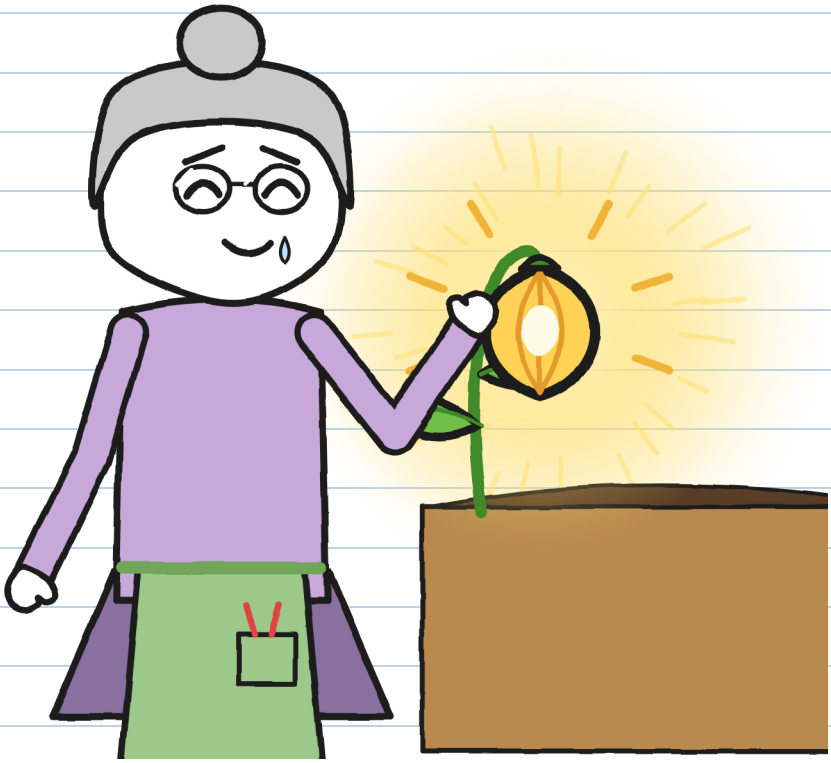


パンくずはヒックしなかった。口をあけてほおずきを見ていた。ぼくと同じように。もうこわさをまねしていないことに気づいた。これをまねしていた。



フローラはしばらく何も言わなかった。それからほおずきの一つに指の先でふれた。ゆっくりと、長いあいだ待っていたものにふれるように。

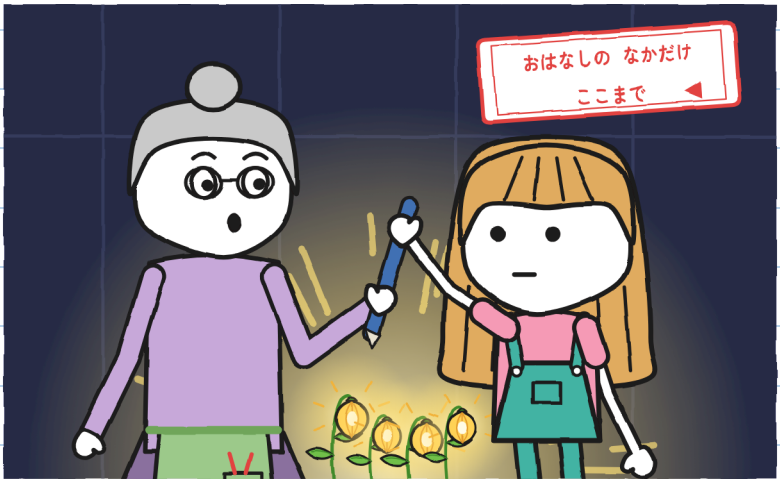
「うんがぞいの道は、こんなふうだった」と言った。



ぼくもさわった。パンくずも。日なたの石みたいにあたたかかった。

フローラはハンドルを回して雨を止め、サインをするためにボールペンを出した。
やっと。
フリータは指二本で止めた。
「まだ」
ほおずき七つを見つめていた。

「八つめがまだ。わたしがびんを早くあけたから。さがさなきゃ」
それから台所へ行って、箱のラベルをはがし、オーバーオールのポケットにしまった。



とどけるなら、ぜんぶ。 —J.

みんなで台所にもどった。

「庭の戸はしめたままだ」とフローラは言った。「まだ外には出ないよ」

フリータが数える稲光（いなびかり）がなくなるまで待ち、それから最後のかみなりから数えてさらに三十分待った。もう雨はふっていなかった。あらしは行ってしまった。



そして八つめは外にいる。どこかのくらやみに。土が間に合わなければ、またねむってしまう：ただの石だ。フローラのサインがなければ、夜明けに2番はとんでたなにもどってしまう。

「さがしに行こう」とフリータは言った。

フローラは夜を見た。それから庭のへいを三回たたいた。ベラさんが言っていたとおり、それはドラゴンの家のかべだ。



「今度は」と言った。「あなたたちだけじゃない」

第 6 章

やっつめ

フローラとベラさんと、ランタンと自転車で出た。フリータはからのびんとラベルをオーバーオールのポケットに入れて、ぼくはパンくずをレインコートに入れていた。パンくずは、ぼくのあごのところから頭を出していた。

庭を、小道を、うんがのふちをさがした。



何もない。八つめがねむってしまったなら、あのぬれた石のどれでもありえる。

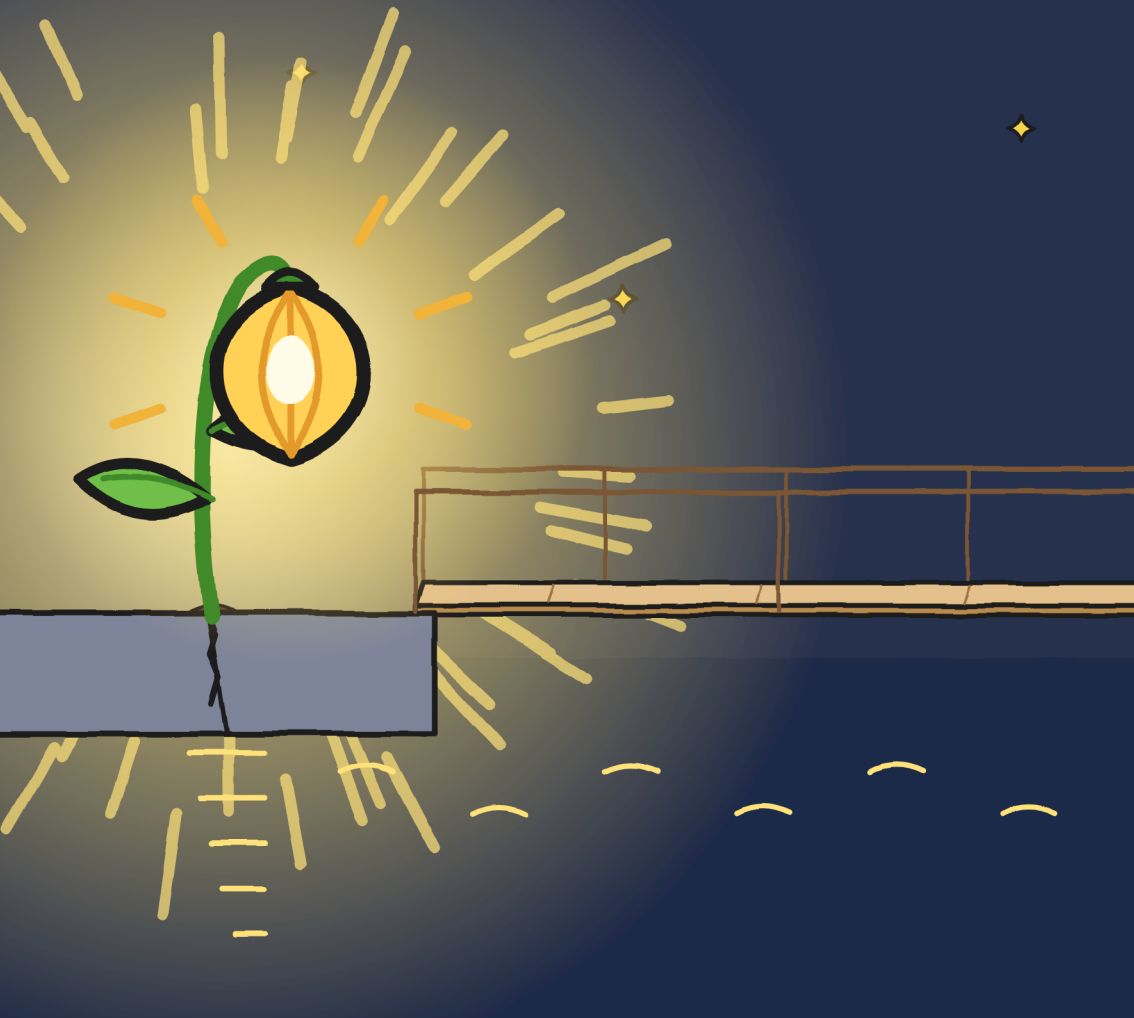
ランタンの光で、ぬれた石がきらきら光り、見分けるのもむずかしい。
そのとき気づいた：さいたばかりのほおずきは、ほんの少ししか光らない。三つのあかりをつけたままさがしていたから、のまれていたのだ。
「待って。あかりをぜんぶ消して」

トニョは自転車を止め、ベラさんはランタンの火を小さくし、フローラはライトを消した。
ぼくたちはじっとしていた。くらやみの中、道のおくに小さなあかりがあらわれた。



いたのはしのふもとに。

たぶん、雨が八つめを小道から道までながしたんだ。二つの石のわれ目に、指一本ぶんのぬれた土。いたのはしがはじまるところで、ひとりで根づいた。遠くからは小さなあかり。近くでは、ぜんぶをてらした。



フリータは長いあいだはしを見つめていた。あかりがあるとちがって見えた：みじかくて、広くて、水より木のほうがずっと目立った。

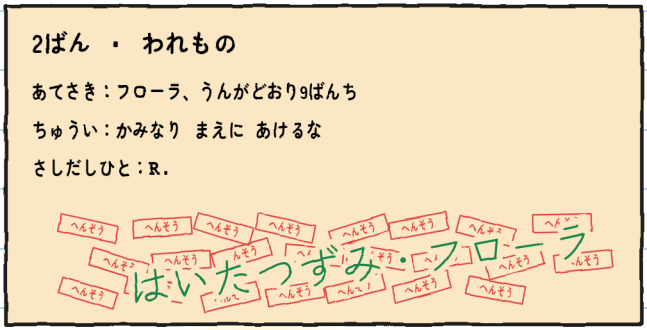
はしに足をのせた。一本だけ。それからひいた。

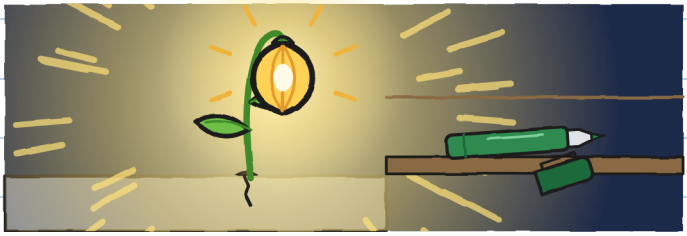


遠くからは、もうこわくない。近くでも、ほとんど。 —J.

「この子はここにのこる」とフローラは言った。「自分で場所をえらんだ」

フリータはラベルとみどりのペンをわたした。どのインクがきえないかは、もう知っていたからだ。フローラはその場で、八つめのあかりのもとでサインして、ペンを返した。





げんかん
玄関で別れるとき、フローラがざるをくれた：「持っておいき。次のあらしのために。それと、マラに言っておいて。やっとだね、って」

ベラさんはパンくずを巣にもどして、ぼくたちをバンで店まで送ってくれた。トニョの自転車はうしろにのせて。道路のはしを通った：夜はおおはしが船を通すために上がるから。店の前でおろして、ドラゴンたちのところへもどっていった。

店はくらかった。カウンターにマラさんはいなかった。

カウンターの下にいた。



「もうすんだ？」とマラさん。
「とっくに」とフリータ。

もうふ、みみあて、ヘルメットがわりの小なべ。二十三回の配達、あらしの日は一度もなし。

やっと、「ここでやること」のわけがわかった。
フローラのことづけを伝えた。マラさんは小なべをまゆげまで下げた。

「ぼくもかみなりがこわい」と言った。
マラさんは何も言わずにもうふをもちあげた。



ぼくもカウンターの下にもぐった。ちょうど入れた。

マラさんはトニョに、スツールのとなりに配達用の箱をひっくり返しておいた。
「あなたの場所。今のところは」とマラさんは言った。

トニョはすわって、フリータのペンで、リュックの小さな字に二つ言葉を書き足した：「ねこも」。



今は、小さい字が本当のことを言っている。 —J.

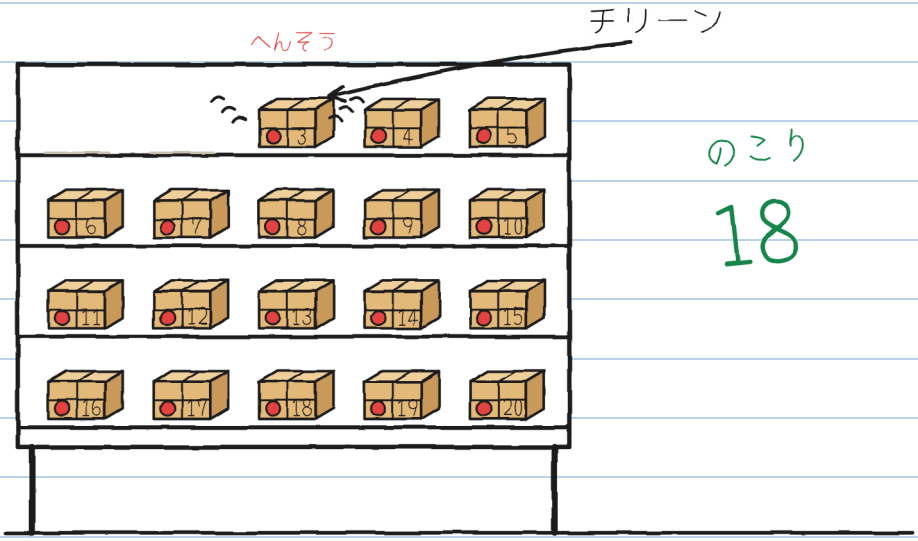
ぼくのプランを直した。かみなりのための：

1. ぞうを数える。
2. だれかといっしょに。
3. ヒックが出ても、だいじょうぶ。

のこり



そして、何かのハンターだと言わないこと。 —J.

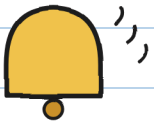


その夜、家に帰る前に、もどってきた荷物の一つが鳴った：チリーン。小さなベルみたいに。3番だ。

ラベルにはこう書いてあった：

3ばん

トニョちゃんへ

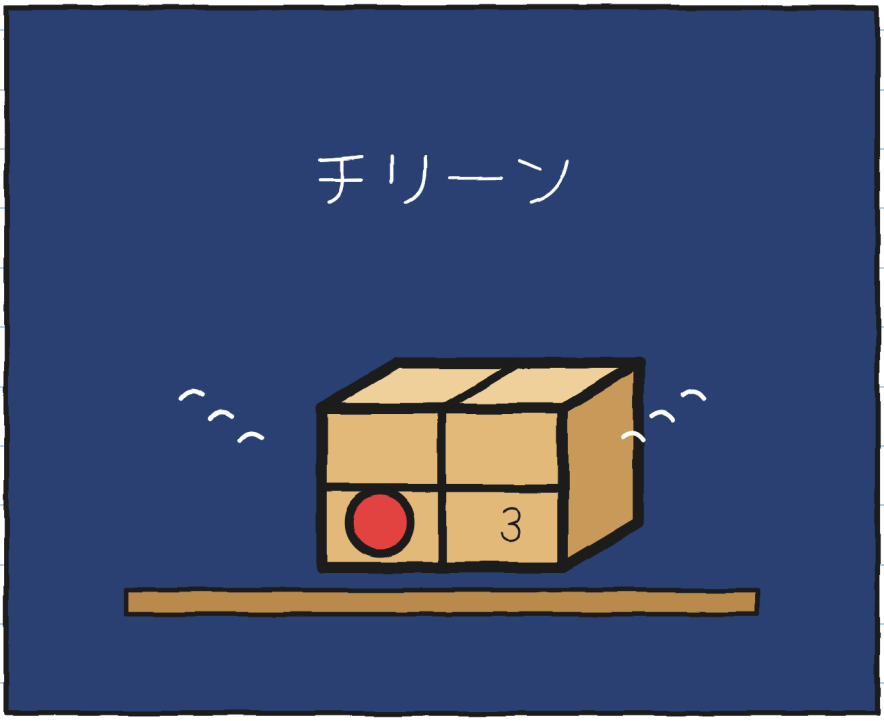


トニョの顔は、ヘルメットと同じ色になった。



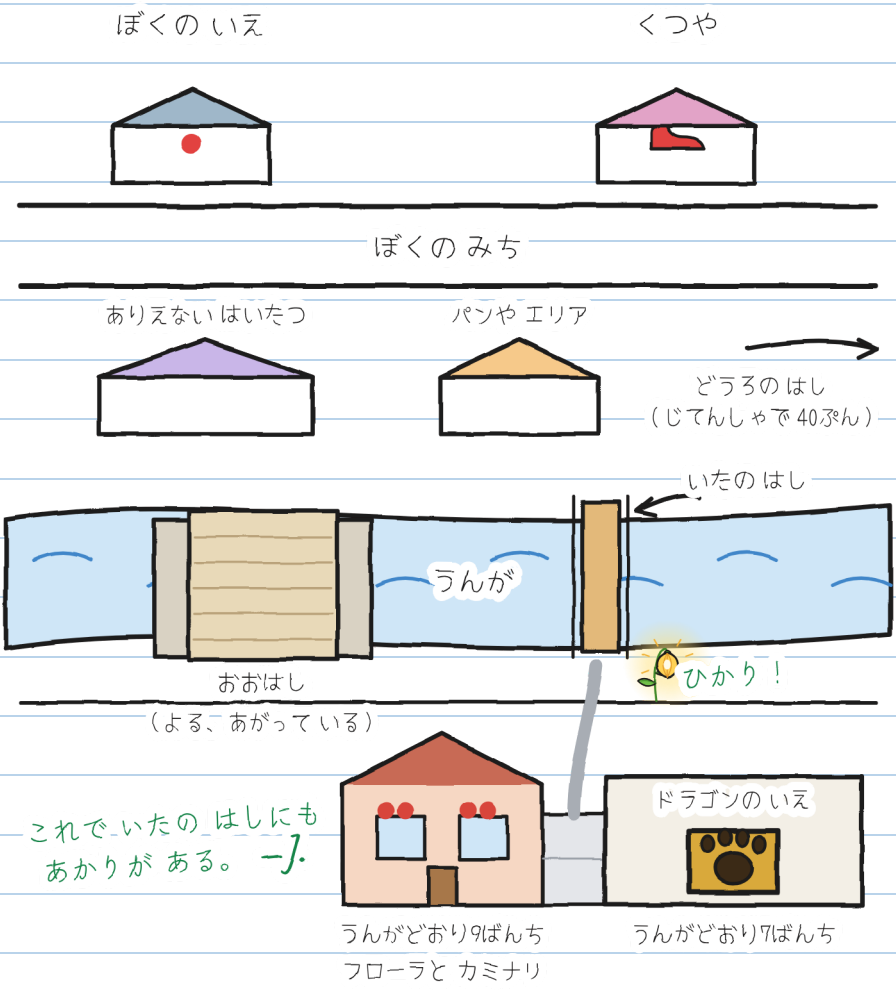
ありえない はいたつ ・3

（もうすぐ）



だれがトニョに荷物を送ってくるの？ ーJ.

まちの ちず（バージョン2）



R.のカードがある。さいしょの手がかり二つはノート1の。新しいのを書いた：

R.に ついて わかって いる こと



R.

1. ものすごく じが きたない（マラさん）。
2. ベラさんは イニシャルを よんで まっあおに なった。
3. ずっと まえ、フローラと ほおずきを うえて いた。
4. おそくても、やくそくは まもる。
5. フローラの まほうの ガラスを つくった。

6. だれも名前を言わない。それも手がかり。 —J.

きみは？R.はだれだと思う？

わたしは、R.は たぶん……

ひとつの おはなし、むっつの サイズ

サイズは六つあって、3さいから16さいまで。ことばは20いじょう。**XXS**、**XS**、**S**、**M**、**L**はページも絵も同じ。**XL**は小説。ちがうのは話し方だけ。

サイズ XXS · PRE-A1
フリータが ななつめの たねを つかまえる。

サイズ XS · A1
ゆかに たねが ひとつ のこって いた。フリータが つかまえた。ななつ。

サイズ S · A2
また いなびかり。ゆかには たねが 一つ のこって いた。フリータが つかまえた。七つ。

サイズ M · B1
次のいなびかりで、ゆかにのこっていたのはたねが一つ。フリータがつかまえた。七つ。

サイズ L · B2
また稲光が光ったとき、ゆかにはたねがただ一つのこっていて、フリータがつかまえた。七つ。

サイズ XL · B2-C1
イラスト小説・13+
CEFRのレベルは目安です。

みんな自分のサイズで。おなじあらし。 —J.

おうちの ひとと せんせいへ

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

本当の あらし：どうする？

1. かみなりが聞こえたら、遠くても家の中へ。かみなりはもう、あなたのところまで落ちてくるかもしれない。
2. おとなの人といっしょに中に入り、まど、ドア、ガラスからはなれる。温室、はし、木、水には近づかない。
3. さいごの かみなりから 三十分は 外に 出ない。
4. ぞうを数えると、かみなりが近いか遠いかがわかる。おちつくのにもいい。でも、いつ外に出ていいかはわからない。

あなたの あらしを かぞえよう

いえの なかで：いなびかりから かみなりまで、ぞうを かぞえる。

いなびかり	ぞう	キロメートル (3とうで1キロ、だいたい)	あの いなびかりは、ちかい？ とおい？
1	15	5	—
2	9	3	もっと ちかく